

青年期における加害妄想的観念に至る要因

姜, 旻志
九州大学大学院人間環境学府

黒木, 俊秀
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/7177887>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 15, pp.21-26, 2024-03-15. Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



青年期における加害妄想的観念に至る要因

姜 旼志 九州大学大学院人間環境学府 ／ 黒木俊秀 九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本研究の目的は、青年期の自分が他人に危害を加えるかもしれないという加害的妄想的観念を検討することと、その加害妄想的観念の形成に影響する要因を明らかにすることにある。本研究では、68名の大学生を対象に加害妄想的観念、中核的信念スキーマ、パーソナリティ特性、他者からのネガティブな評価への恐怖に関する質問紙調査を行った。後の3つの要因を説明変数とし、加害妄想的観念を目的変数とする重回帰分析を行った結果、“他者への迷惑”と“人の心への傷つけ”のような加害妄想的観念は多くの大学生が体験していた。また、加害妄想的観念に至る要因としては、ネガティブな自己スキーマと他者からのネガティブな評価に対する恐怖は正の影響を認め、誠実性のパーソナリティ特性とは負の影響を示した。以上の結果から、青年期における他者に危害を与えるという妄想的思考は、自己への否定的な認知や他者評価への不安、自己統制の特徴を持つ誠実性の性格と関連することが示唆された。

キーワード：加害妄想的観念、自己ネガティブスキーマ、他者評価不安

問題

青年期は、思春期を経て子どもから大人へ移行する時期であり、家庭以外の環境である学校などの対人関係がより複雑になっていく中で、“自分とは何か”“自分は周りからどうみられているか”のように自分自身のことや他者から評価されることに敏感な時期である。例えば、他人のしぐさや表情などの情報から“私が何か相手に不快を感じさせてしまったのではないか”、“私が人に迷惑をかけたのではないか”などのように、自分のある思いや欠点などにより、相手に害を与えてしまったように加害的な捉え方をすることも考えられる。この加害的な捉え方については、自分の欠点が相手に気づかれたのではないかなどの恐れとして、森田正馬から概念とした対人恐怖の一つである赤面恐怖と類似であると考えられる。対人恐怖は1920年代に一般の人にみられることであったが、1960年代に入ってから、DSMの医学診断意味の改正や対人恐怖の重症度により、社交不安症や妄想性障害、統合失調症などの精神病が発症することを考えられてきた。実際に厚生労働省（2009）の『児童・思春期の精神医療について』によると、精神疾患は思春期では、社交不安症のような対人恐怖による精神疾患が発症しやすい時期であり、さらに厚生労働省（2022）の『患者調査』の資料によると精神疾患を有する患者が389万人で徐々に増えている状況であり、思春期に影響を受けた青年期に対しても長引くことが考えられる。このことから、青年期は対人恐怖による精神病を有してしまうかそうではないかという境目にいることも推察できるため、その特徴の把握で早期発見や予防の必要があると考えられる。また、その中でも青年期の“人に害を与えてしまったのではないか”という加害的に捉えてしまうのは、対人関係で思い込みそうかもしれないと妄想的に捉えてしまうことも考えられる。

I. 青年期の加害妄想的観念

妄想的観念は、DSM-IV（American Psychiatric Association, 1994）によると「妄想ほどの強さはない観念で、自分が苦しめられている、迫害されている、または不当に扱われているという疑念」と定義されている。従来、妄想は統合失調症や妄想性障害などに見られる精神病症状として認識されてきた（Jaspers, 1948）。しかしながら、笠原・藤縄（1978）や Manschreck（1979）などが、精神病以外でも出現することを報告し、健常群

においても支配観念として見られるという先行研究から、臨床群と健常群との連続性が示唆されてきた（Fenigstein & Vanable, 1992；Petersら, 1999；丹野ら, 2000；金子, 2000）。このことから、健常群の妄想的観念の成因は臨床群の妄想の成因とも連続していると考えられ、健常群における妄想的観念形成の要因を明らかにすることにより精神病の早期発見や予防に寄与する可能性があり、臨床的意義が高いと考えられる。

健常群を対象とした妄想的観念の研究は、主に被害妄想観念の研究が盛んである。他人は何も思っていないことについて相手が自分に何かしているのではないかというように被害的に受け止めてしまうことが大学生で報告され（Fenigstein & Vanable, 1992）、それらの先行するパラノイア研究に基づき、金子（1999, 2000, 2003）は、被害的な自己関係づけと、対人恐怖心性及び抑うつ感情・登校拒否傾向と関連を示した。また、森本・丹野（2004）は、大学生の被害妄想的観念の素因に関する研究を行い、社会的回避傾向が高い人はストレスを体験した際に被害妄想的観念を持ちやすいことを示唆した。しかし、丹野ら（2000）は、妄想的観念を、Jaspers（1948）のように確信度・訂正可能性・内容の正誤のような妄想の形式的側面よりも、被害・微小・誇大のような3つの主題に分けて考える主観的側面に目に向け、さらに広い妄想的観念の構造化を考えている。彼らは大学生を対象として妄想的観念を主観的に整理して、被害・加害・庇護・他者操作からなる妄想的観念チェックリストを作成し、大学生の妄想的観念を検討した。その結果、加害妄想的観念94%、被害妄想的観念75%と、被害観念のみならず、加害観念に関しても健常群が体験することが少なくないことが示唆された。丹野ら（2000）の妄想的観念チェックリストの加害観念尺度では、「知らない間に、他の人を侮辱しているのではないかという疑い」や「知らない間に他の人の心を傷つけているのではないかという疑い」、「自分が周りの人を侮辱したり、傷つけたりして迷惑をかけている」という内容であることから、加害観念とは“他者に被害を与えている自己への疑い”ということができる。また、青年期において自分によって周りの人に不快感を与えてしまったのではないかという心配や思いなどの体験が珍しくないことが推測される。以上から、本研究では、健常群においても見られる妄想的観念の中でも、特に青年期に多く体験される加害観念に注目し、丹野ら（2000）の尺度を用

いて、青年期の加害妄想観念の形成に影響を与える要因を検討する。

Ⅱ. 加害妄想観念の要因：①スキーマの観点から

丹野（2001）は、妄想メカニズムとして、「スキーマ（心の深層にある認知構造・信念体系）」から「引き金となる要因（周りとのコミュニケーションが取れない状況などのストレスフルな出来事や幻覚・錯覚などの異常知覚など）」のようなある出来事と「推論障害」によって妄想が発生し、さらに妄想の発生に引き続いて、恐怖や怒りや不安などのような情動が表出され、引きこもりや攻撃などのように行動が起きると述べた。このように、妄想観念は、我々の認知にあるネガティブな出来事や誤った推論が混ざって起きるものであり、それが心理面や行動面にも影響される可能性がある。すなわち、妄想形成の過程において、自己の信念のスキーマによって物事を加害的に受け止めてしまうことが考えられる。実際に、被害妄想的観念の発生に影響される素因ストレスモデル研究を行った丹野・森本（2004）によると、ストレスを受けるようなネガティブな出来事によって、被害妄想的観念が持ちやすいことを示し、このように、妄想的観念が起きやすい要因は、自己への否定的な信念・考えによるもので考えられる。本研究では、特に自己にネガティブな思いや考え方によって加害妄想観念が生じると推測できる。

Ⅲ. 加害妄想観念の要因：②他者評価への不安の観点から

丹野ら（2000）の妄想的観念チェックリストの加害妄想的観念尺度の項目は、「知らない間に、他の人を侮辱しているのではないかという疑い」、「知らない間に他の人の心を傷つけているのではないかという疑い」、「他の人たちに迷惑をかけているという感じ」、「取りかえしのつかない重い罪を犯してしまったのではないかという考え」、「知らない間に、誰かの人生をダメにしているのではないかという疑い」、「知らない間に誰かにケガをさせているのではないかという疑い」などがある。以上から、加害妄想的観念は、対人関係において、自分よりも他者を中心に考える傾向にある。また、相手から自分が“どうみられているのか”、“もしかしてこう思われてしまうのではないか”などの他者評価への不安にも陥る傾向も推察できる。高倉・横田（2009）は、妄想的観念と対人恐怖心性との関連研究において、妄想的観念と対人恐怖心性や社会的スキルとの関連を示した。「自分や他人が気になる悩み」や「集団に溶け込めない悩み」のような対人恐怖心性の特徴が加害観念を高めることが示唆され、また加害観念と社会的スキルの感情統制（コミュニケーション過程において個人内に生じる感情に対処するスキル）とは正のパスが見られた。さらに、高倉・横田（2009）は、妄想的観念について、他者の評価と他者から評価される自己に捉われやすく、自己否定的な評価との関連が妄想的観念に深く関連があると述べており、他者評価に対する敏感さによって妄想的観念が高まると推測される。このことから、本研究では加害妄想的観念の形成に影響する要因として、社会場面での他者評価への不安が高まることで加害妄想的観念が強まる可能性が考えられる。

Ⅳ. 加害妄想観念の要因：③性格特性の観点から

対人関係では個人と個人が出会ってそれぞれの経験を基に関わっていく。その中で、個人の特性によって物事の受け入れ方

や対処の仕方が変わってくることが推察できる。佐々木ら（2002）は、精神病理症状と素因としての性格特性との関係を、精神病理症状尺度と5因子性性格検定（Five Factor Personality Questionnaire）を用いた性格特性との相関により検討し、加害妄想的観念と統制性（事物や自己を統制する特性）との負の相関、及び情動性（心身の危険に対する敏感さや情動反応の強さ）との正の相関を見出した。このことから、加害妄想的観念と、繊細さや情緒的に不安定なパーソナリティとの関連性が示唆される。また、妄想的観念は、ネガティブな自己評価信念（森本ら、2002）や自己否定的な評価（高倉・横田、2010）との関連性が認められることから、その形成に影響を与えるパーソナリティ特性としては、不安になりやすい・心配しがち・悩みやすさ・自信のなさなどのような情緒不安定性の性格特性が要因として考えられる。そこで、本研究では、Big Five 短縮版（並川ら、2012）を採用して、パーソナリティ特性を評価し、加害妄想的観念の形成への影響を検討する。

目的

以上より、本研究では、青年期が体験されている加害観念を検討し、スキーマ・他者評価不安・パーソナリティの観点から推測した仮説により、加害妄想観念の要因を検討する。

仮説1）自己へのネガティブスキーマが、加害妄想観念の要因に影響する

仮説2）情緒不安定性の性格特性が、加害妄想的観念の要因に影響する

仮説3）他者評価への不安が高いことによって、加害妄想的観念に影響する

方法

1. 調査協力者

2020年12月にA大学とB大学に在学している平均年齢22.35歳（SD=1.95）の大学生・大学院生68名（男性13名、女性55名）を対象にする。新型コロナウイルス感染の恐れがある時期であったため、Google フォームアンケートを用いて実施した。

2. 調査内容と分析手続き

（1）フェイスシート：性別・年齢・学部／学府（任意）

（2）加害観念の要因を測定する尺度：

1）妄想観念チェックリスト（Delusional Ideation Check-List；丹野ら、2000）

本調査の中では、青年期の加害妄想観念に至る要因を調べるため、妄想観念チェックリストの加害妄想観念6項目「知らない間に、他の人を侮辱しているのではないか、という疑い（以下、他人侮辱と略する）」、「知らない間に他の人の心を傷つけることを言っているのではないかという疑い（以下、他人の心を傷つけると略する）」、「他の人たちに迷惑をかけている、という感じ（以下、他人への迷惑と略する）」、「取りかえしのつかない重い罪を犯してしまったのではないか、という疑い（以下、重い罪の疑いと略する）」、「知らない間に、だれかの人生をダメにしているのではないか、という疑い（以下、他人の人生をダメにする疑いと略する）」、「知らない間にだれかにケガをさせているのではないか、という疑い（以下、他人に怪我をさせる疑いと略する）」を抜き出し、用いた。「全くない（1点）」、「たまに

ある（2点）, 「よくある（3点）」の3件法で構成されている。

2) Big Five 尺度短縮版（並川ら, 2012）

和田（1996）は、形容詞の性格特性語を用いて性格特性を5因子、情緒不安定性（Neuroticism）・外向性（Extraversion）・開放性（Openness）・調和性（Agreeableness）・誠実性（Conscientiousness）を測定する Big Five 尺度を60項目で開発した。しかし、並川ら（2012）は研究や臨床場面での複数の尺度を使われるのが多いため、60項目からなっている尺度は回答者にとって大きな負担になる可能性を考え、29項目からなる Big Five の短縮版を開発した。短縮版の5因子構造は、因子分析で確認され、妥当性は十分であり、内的な一貫性も確認されていた。またオリジナル版と同じく十分な信頼性や因子的妥当性が示していた。「非常にあてはまる」、「かなりあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらとも言えない」、「あまりあてはまらない」、「ほとんどあてはまらない」、「全くあてはまらない」と7件法でとっていたが、先行研究での選択肢の順序性が崩れることで、第1選択肢と第2選択肢、第6選択肢と第7選択肢を同一の選択肢として扱い、5件法のデータとしたため、本調査でも同様に、7件法で取って5件法のデータに扱うことにした。

3) 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度短縮版（笹川ら, 2004: FNE 短縮版と略する）

他者からの否定的な評価についての恐れがあるという社会不安を維持させる認知的な特徴を基に作られた日本版 Fear of Negative Evaluation Scale（石川ら, 1992）を30項目の場合、臨床現場で実施する時やテストバッテリーの組みづらさが考えられたため、笹川ら（2004）は FNE の短縮版を作成した。全12項目で構成されており、「全くあてはまらない（1点）」、「ややあてはまる（2点）」、「どちらでもない（3点）」、「ややあてはまる（4点）」、「非常にあてはまる（5点）」の5件法で行われた。質問項目の中には、4つの逆転項目が含まれている。

4) 日本版 Brief Core Schema Scales（the Japanese version of Brief Core Schema Scales: JBCSS と略する, 山内ら, 2009）

自己へのネガティブなスキーマ（Negative Self: 私は価値がない, 以下 NS と略する）、自己へのポジティブなスキーマ（Positive Self: 私は良い人間だ, 以下 PS と略する）、他者へのネガティブなスキーマ（Negative Others: 他の人たちははずるい, 以下 NO と略する）、他者へのポジティブなスキーマ（Positive Others: 他の人たちは信用できる, 以下 PO と略する）の4下位尺度から構成されている。各項目に示されたスキーマ

について「はい」、「いいえ（0点）」と回答し、「はい」については確信の程度を“少しそう思う（1点）”-“完全にそう思う（4点）”4件法で回答を求めた。

（3）分析手続き

SPSS を用いて分析を行った。

3. 倫理的配慮

本研究の実施は、九州大学大学院人間環境学研究院臨床心理学講座の研究倫理審査会にて承認を受けて実施した。Google フォームアンケートにて、本研究の目的を述べ、氏名や学校名など、個人が特定されるようなデータ収集は行わないこと、調査への協力は任意であり、成績評価やその他の不利益・利益は生じないこと、同意を得た上でであっても、調査中に気分が悪くなった場合は、調査を中断・中止しても構わないこと、回答内容に関しては研究以外の目的で使用せず、統計的に処理した結果のみを個人が特定できない形で公表すること、得られたデータは研究施設内にて厳重に管理すること、データは最終成果発表後、ただちに破棄することを記載し、同意を得た上で本調査を行うことを説明した上で調査の協力を依頼した。

結果

1. 各変数の検討（各変数の記述統計量は表1に示す）

内的整合性を検証するため、Cronbach の α 係数を算出した。加害観念6項目（丹野, 2000）は $\alpha = .760$ で、ある程度信頼性が見られた。Big Five 尺度短縮版（並川ら, 2012）の29項目は、 $\alpha = .551$ で、低い信頼性が見られた。FNE 短縮版（笹川ら, 2004）の12項目は、 $\alpha = .944$ で、信頼性が高いことが見られた。日本版 Brief Core Schema Scales（山内ら, 2009）24項目は、 $\alpha = .612$ で、ある程度の信頼性が見られた。

2. 青年期における加害観念の比率（図1）

青年期の加害観念を検討するために、尺度項目別に「全くない」、「たまにある」、「良くある」に回答した68名の比率を算出した。その結果、「良くある」と回答した加害観念項目は、「他人への迷惑」18%、「他人の心を傷つける」10%、「他人侮辱及び重い罪の疑い」3%が見られた。また「たまにある」と回答した加害観念項目は、「他人侮辱」51%、「他人の心を傷つける」50%、「他人への迷惑」39%、「重い罪の疑い」13%、「他人の人生をダメにする疑い」12%、「他人に怪我をさせる疑い」10%

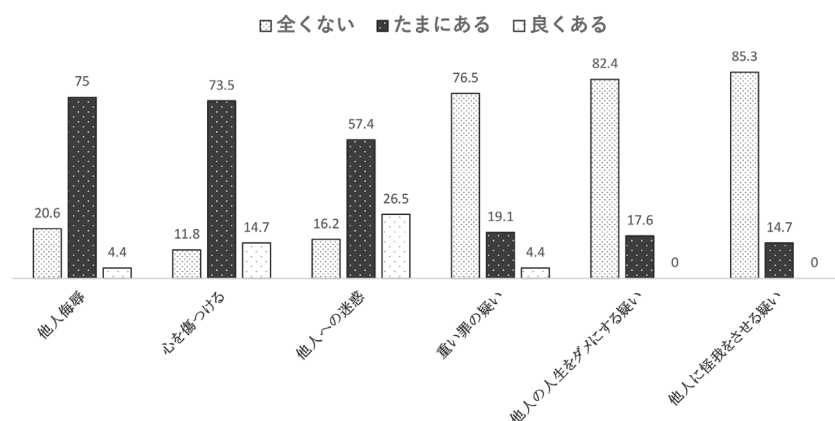


図1 青年期の加害妄想的観念の比率

が見られた。「全くない」と回答した加害観念項目は、“他人に怪我をさせる疑い”58%、他人の人生をダメにする疑い”56%、“重い罪の疑い”52%、“他人侮辱”14%、“他人への迷惑”11%、“他人の心を傷つける”8%が見られた。

3. 加害観念に及ぼす影響

加害観念に影響を与える要因を検討するため、加害観念を目的変数とし、FNEとBIG FIVE（5因子）、JBCSS（4因子）の因子を説明変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、BIG FIVEの外向性・情緒不安定性・開放性・調和性、またJBCSSのPS・NO・POは有意にみられず、除外された。FNEとJBCSSのNSとBIG FIVEの誠実性に関しては有意に見られた（ $F=13.72, p<.01$ ）。また、加害観念の総変化量の39.1%（調整された決定係数によると36.3%）がモデルに含まれた独立変数によって説明されている（表2）。個別独立変数の従属変数に対する影響と統計的な有意性を検定した結果、加害観念に影響を及ぼす独立変数は、NS（ $t=2.794, p=.001$ ）、FNE（ $t=3.063, p=.003$ ）、誠実性（ $t=-2.225, p=.030$ ）である。その中でも標準化係数により、加害観念にはFNE、NS、誠実性が影響を及ぼすことが示された（表3）。

考察

1. 自己へのネガティブな認知

加害妄想的観念は、他者評価への不安と自己へのネガティブ

スキーマが影響を及ぼすことが示され、仮説1）と仮説3）については支持された。加害観念を有するほど他者評価に敏感であること、自分自身に否定的な信念を持つほど加害観念に陥ることが明らかになった。自己へのネガティブなスキーマについては、「私は愛されていない」、「私は価値がない」、「私は弱い」などの項目内容から、自分のことを否定的に思っている特徴があり、批判的な信念を持ち、行動の原因を自己に帰属しやすいことが推察できる。また、他者評価への不安との正の相関が見られたことから、他者の機嫌や何気ない行動を読み取って自分のせいで相手を不快にさせてしまったのでは無いかという加害的な受容に至ることが推測される。

2. 誠実性を持つパーソナリティ

その一方、仮説2）は支持されず、誠実性のパーソナリティが加害妄想観念に負の影響を及ぼすことが明らかになった。丹野・森本（2004）の研究では、“私が害を与えられるのではないか”という被害妄想観念と情緒不安定性の性格との影響がみられた。加えて本研究では、同じ妄想的観念でも妄想観念の主題によって、つまり“私が害を与えるのではないか”のように主体が本人なのか相手なのかによって違うことが明らかになった。このことから、金子（2000, 2001）の自己関係づけと関連がある被害妄想的観念とは違う、加害妄想的観念では他者関係づけの特徴を新たな視点として位置付けると考えられる。誠実性の性格の特徴として、計画性や勤勉性や良心性が高い（John,

表1 各変数の統計量と相関係数

	M	SD	1	2	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	4.1	4.2	4.3	4.4
1. 加害観念	9.57	2.01	1										
2. FNE	39.41	11.59	.495**	1									
3. BIG FIVE													
3.1 外向性	17.75	5.30	-.048	-.220	1								
3.2 誠実性	20.25	7.26	-.289*	-.043	.195	1							
3.3 情緒不安定性	18.35	5.26	.332**	.600**	-.344**	.061	1						
3.4 開放性	18.18	5.47	-.013	-.204	.196	.150	-.250*	1					
3.5 調和性	21.82	5.89	-.174	-.128	-.096	.284**	-.182	.207	1				
4. JBCSS													
4.1 NS	5.37	4.43	.511**	.470**	-.173	-.173	.416**	-.171	-.173	1			
4.2 PS	10.34	5.95	-.198	-.373**	.104	.182	-.229	.461**	.182	-.245*	1		
4.3 NO	0.66	1.35	.051	.148	-.184	-.222	.066	-.209	-.222	.129	.045	1	
4.4 PO	10.34	5.95	.023	-.036	.003	-.007	-.013	.143	-.007	-.102	.134	-.137	1

$p<.01$ **, $p<.05$ *

表2 重回帰分析に対する分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F	有意確率
回帰	105.95	3	35.32	13.72	.001**
残差	164.69	64	2.57		
合計	270.63	67			
$R^2(\text{adj. } R^2) = .391(.363)$					

表3 加害観念に及ぼす要因に対する重回帰分析

独立変数	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準偏差			
定数	7.732	.902		8.574	.001
NS	.142	.051	.313	2.794	.007**
FNE	.059	.019	.339	3.063	.003**
誠実性	-.061	.027	-.221	-2.225	.030*

1990; 遠藤ら, 2017) ことから, 生活や仕事などでその人なりにコントロールができることが挙げられ, そのようなコントロールが失うと, より加害妄想的観念に至ることが考えられる。その反面, 誠実性のパーソナリティが高いと加害的な物事の受け入れは低くなる可能性があるため, 自分をコントロールしないことで加害妄想的観念に至ることが考えられる。また, 調和性のパーソナリティと正の相関が見られたことから, 対人関係で社交的な面がありながらも, 自分自身を守りつつ, 対人場面で上手にコントロールしながら関わっていく中で, 困り感なく自分なりのレジリエンスを持ち, 適応していくことも推察できる。しかし, 今枝 (2021) によると, 誠実性のパーソナリティは過剰適応との関連を示し, 自分らしさを持ちつつも社会から求められている道徳心や社会的規範に合わせようとする傾向の可能性を示唆したことから, 誠実性のパーソナリティが高いからと言って加害妄想観念に影響されにくく, うまく対人関係に適応できることまでは考えられる。

3. 今後の課題

今回の研究では“自分がそうしてしまったことで相手に迷惑をかけてしまう”という加害妄想観念の要因を検討していた。図1のように“他人侮辱”, “心を傷つける”“他者への迷惑”が高い経験率を示唆しており, この体験については具体的に被験者が対人恐怖の観念のように何か自分の欠点から体験されたのかなどの, 他者関係づけを被験者なりにしてしまうことについては今後調査する必要がある。また, 今回の研究では対人恐怖の病態水準の高いほど物事を妄想的に受け入れてしまうことについて着目したが, より加害的な物事の捉え方を理解するためには様々な心性の特徴を踏まえて, 対人関係の中で加害的に受け取るものの感覚を把握することが必要だと思われる。また, 個人に合わせた質的調査を通した加害妄想的観念が健常者においてどのような意味を持つのかなど, 他者評価不安や性格面だけではない部分を具体化してみる必要がある。

〈付記〉

本研究の調査にご協力いただいた調査参加者の方々に心より感謝しております。また, 本研究について様々なご助言をしていただいた教員の皆様に感謝いたします。

文献

- American Psychiatric Association (1994) Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. 4th ed. Washington DC: APA.
- 朝倉聡・小山司 (2009). 対人恐怖の臨床一疾患の分類も含めて, 黒木俊秀 (編), 岡崎祐士・青木省三・宮岡等 (監修), こころの科学—対人恐怖, 日本評論社, pp.26-31.
- Fenigstein, A., & Vanable, P. A (1992). Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 129-138.
- Fowler, D., Freeman, D., Smith, B., Kuipers, E. K., Bashforth, H., Coker, S., Hodgkins, J., Gracie, A., Dunn, G., & Garety, P. A (2006). The brief core schema scales (BCSS): Psychometric properties and associations with psychosis samples. *Psychological Medicine*, 36, 749-759.
- 今枝美幸 (2021). 本来感と性格特性, 過剰適応の関連. 金城学院大学論集 人文科学編, 第18巻, 第1号.
- 石川利江・佐々木和義・福井至 (1992). 社会的不安尺度 FNE・SADS の日本版標準化の試み. *Japanese Association of Behavioral and Cognitive Therapies*, 第18巻, 第1号, 10-17.

- 入野晴菜・鈴木伸一 (2018). なぜ人が怖いのか?—心理学の観点から. 野村総一郎 (編), こころの科学—“人が怖い”の心理学, 日本評論社, pp.14-19.
- Jaspers, K. (1948) *Allegemeine Psychopathologie* 5. Auflage (ヤスパース K. 内村祐之・西丸四方・島崎敏樹・岡田啓蔵 (訳) (1953).
- John, O. P. (1990). The “Big Five” factor taxonomy: Dimensions of personality in the natural language and in questionnaires. In L.A. Pervin (Ed), *Handbook of personality: Theory and research*. New York: The Guilford Press, p.66-100.
- 笠原嘉・藤縄昭 (1978). 妄想. 大橋博司・保崎秀夫 (編), 現代精神医学大系 3 A 精神症候学 I. 中山書店.
- 金子一史 (1999). 被害妄想的心性和他者意識および自己意識との関連について. *性格心理学研究*, 第8巻, 第1号, 12-22.
- 金子一史 (2000). 青年期心性としての自己関係づけ. *教育心理学研究*, 48, 473-480.
- 金子一史・本城秀次・高村咲子 (2003). 自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連. *パーソナリティ研究*, 第12巻, 第1号, 2-13.
- 厚生労働省 (2002). 平成21年度「今後の精神保険医療福祉のあり方等に関する検討会」の児童・思春期の精神医療について. https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/06/dl/s0604-7e_0001.pdf (2023年10月3日取得).
- 厚生労働省 (2022). 令和4年度「第13回地域で安心して暮らせる精神保険医療体制の実現に向けた検討会」の参考資料. <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000940708.pdf> (2023年10月3日取得).
- Manschreck, T. C (1979). The assessment of paranoid features. *Comprehensive Psychiatry*, 20, 370-377.
- 中村敬 (2018). 「人が人を怖がる」ことを精神医学はどうみるか. 野村総一郎 (編), こころの科学—“人が怖い”の心理学, 日本評論社, pp.8-13.
- 鍋田恭孝 (2009). 人を恐れる心理—意識される対人不安・意識されにくい対人不安. 黒木俊秀 (編), 岡崎祐士・青木省三・宮岡等 (監修), こころの科学—対人恐怖, 日本評論社, pp.18-25.
- Peters, E. R., Joseph, S. A., & Garety, P. A (1999). Measurement of delusional ideations in the normal population: Introducing the PDI (Peters et al. Delusions Inventory). *Schizophrenia Bulletin*, 25, 553-576.
- 笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み—項目反応理論による検討. *Japanese Association of Behavioral and Cognitive Therapies*, 30, 2, 87-98.
- 遠藤真名美・松田英子・柴田良一 (2017). Big Five パーソナリティがタイ人ストレスコーピングに及ぼす影響—認知的評価媒介モデルの検証. *江戸川大学紀要*, 第27号, 335-341.
- 丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典 (2000). 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成. *The Japanese Journal of Psychology*, Vol.71, No.5, 379-386.
- 高倉佑紀子・横田正夫 (2009). 妄想様観念と社会的スキル, 対人恐怖心性との関連. *日本心理学会大会発表論集 (日本心理学会大会発表抄録集)*, 巻76, 361.
- 丹野義彦 (2001). 『エビデンス臨床心理学—認知行動理論の最新線』, 日本評論社, (pp.127-153).
- 丹野義彦・坂本真士 (2001). 『自分のこころからよむ臨床心理学入門』, 東京大学出版会, pp.93-127.
- 丹野義彦 (2012). 基礎心理学と臨床心理学の協調—妄想的観念の認知行動モデルを例に. *Technical Report on Attention and Cognition*, No.20.
- 丹野義彦・森本幸子 (2004). 大学生における被害妄想的観念に関する研究—素因ストレスモデルを用いて. *The Japanese Journal of Psychology*, Vol.75, No 2, 118-124.
- 山田和夫 (2018). 比較文化精神医学の時点からみた“人が怖い”の心理. 野村総一郎 (編), こころの科学—“人が怖い”の心理学, 日本評論社, pp.25-29.
- 山下格 (2009). 対人恐怖と日本の社会. 黒木俊秀 (編), 岡崎祐士・青木省三・宮岡等 (監修), こころの科学—対人恐怖, 日本評論社, pp.14-17.
- 山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦 (2009). 日本語版 Brief Core Schema Scales の信頼性・妥当性. *心理学研究*, 第79巻, 第6号, 498-505.

Factors affecting the development of delusional ideas as to harming others: A study in adolescents

Mingi KANG

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Toshihide KUROKI

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this study is to identify factors that influence the development of delusions of harm, which is self-doubt that one might harm others. The purpose of this study is to examine delusions of perpetration in adolescents and to identify factors that influence the development of delusions of perpetration, which is self-doubt that one might harm others. In this study, a questionnaire survey was conducted on 68 college students were administered a questionnaire regarding delusional ideation, belief core schema, personality traits, and fear of negative evaluation. The results showed that many adolescents experienced “annoyance to others” and “hurt feelings toward others.”

Multiple regression analysis with schema, personality, and fear of negative evaluation as explanatory variables and delusions of harm as the objective variable revealed that negative self schema, conscientiousness personality traits, and fear of negative evaluation from others were influential factors in causing delusions of harm. These results suggest that delusions of othering in adolescents may be related to self-perception, conscientiousness personality traits, and fear of negative evaluation from others.

Keywords: delusions idea of harm, self-negative schema, fear about others' evaluation